

### 4 スポーツの歴史を主題に自ら研究・発表することを目指した授業展開例

教科(科目)	地歴公民 (世界史 B)	単元名	「世界史への扉」
本時の主題	スポーツの歴史とその発展について調べ学習を行う (2～5時間目 / 5時)		
本時の目標	<p>(1) 身近にあるスポーツに目を向け、それと歴史の発展とについて考察する。 【思考・判断】注1</p> <p>(2) 身近なものや日常生活にかかわる事柄から、その起源や変遷などを追究させ、歴史的事項の理解に自ら取り組もうとする態度を養う。 【関心・意欲・態度】注2</p> <p>(3) インターネットなどを利用し、よりよい情報を収集できる力と、それらを発表しやすいようにまとめる方法を身に付けさせる。 【技能・表現】注3</p>		
指導のねらい	学 習 活 動	指導上の留意点・観点別評価	
・グループ分け	<p>3～5人のグループをつくり、グループごとに協力し調査・発表を行う。</p>	注4	
・テーマの設定	<p>自分が所属していた部活や興味のあるスポーツについて調べる内容を考え、海外で成立し日本へ普及したものや、逆に日本で成立し海外へ広がっていたものなどを予想させる。</p> <p>・ワールドカップサッカーの歴史を紹介し(資料集)スポーツとその成立の過程を考えてみる。</p> <p>・身近なスポーツを取りあげ、他のグループと同じ競技を選ばないように調整する。</p>	<p>・身近なスポーツの起源や変遷を調べさせ、それらに目を向けさせる。</p> <p>・調べる具体的な内容や疑問点などをあらかじめまとめさせておく。</p> <p>・調べる内容について、グループごとにいつ頃が起源でどのように発展していったのかなどを予想させ仮説を立てさせる。</p> <p>【思】 注5</p> <p>&lt;評価方法&gt;</p>	
・テーマの調査	<p>決められたテーマの内容で、グループごとに調査を行う。</p> <p>・図書館での参考図書の利用や、コンピュータでインターネットにアクセスし、テーマ研究に必要な内容をまとめる。</p> <p>・コンピュータの接続などの技術に慣れていない生徒に対する説明を行う。</p>	<p>・机間指導により観察。調べる内容や仮説を書いたプリントを授業終了時に提出。</p> <p>・効果的にコンピュータを利用し情報を収集する方法や、参考図書から必要な内容だけ抜き出せるような方法を学ぶ。【関】 注6</p> <p>&lt;評価方法&gt;</p> <p>・机間指導により観察。</p>	
・調査項目のまとめ	<p>調査した内容についてグループごとに話し合い、わかりやすくそれらをまとめる。</p>	<p>・ホームページのURLを記録させ、参考資料に記載するように指示する。まとめて提出させる。</p>	

<p>・調査テーマの発表</p>	<p>・いろいろな資料を総合的にまとめ、そのスポーツの発展や日本との関係がわかるように記入する。</p> <p>・次回のテーマ学習の際にはパワーポイントなどのコンピュータソフトを利用してプレゼンテーションできるように機材の使用方法などを伝える。</p> <p>■</p> <p>調べた内容についてグループごとに、工夫して発表する。</p> <p>■</p> <p>・時間を決め、その中でグループで協力しあいながら発表する。</p> <p>・発表の態度や方法、発表内容などいろいろな観点において他の生徒に評価させ、次回のプレゼンテーションに役立てるようにする。また、今回の発表についてもそれらを参考にさらに深めることができるようにする。</p>	<p>・スポーツの発展の歴史とその時代の歴史的背景を考えさせる。 注7</p> <p>・発表しやすいよう体系的にまとめる。 【技】 注8</p> <p>&lt;評価方法&gt;</p> <p>・机間指導により観察。体系的にまとめられているか、日本への伝達や普及について詳しく述べられているかを確認する。</p> <p>・自分たちの予想した内容との違いを発表し、内容について深める。 注9</p> <p>・聞き手にわかりやすく発表する。 【技】 注10</p>
<p>・次回の課題学習について説明</p>	<p>・次回はスポーツにこだわらず、日ごろの食生活に出てくる食材や、都市とその発展についてなどテーマを変えて学習していくように予告する。</p>	<p>&lt;評価方法&gt;</p> <p>・時間内に効果的に発表できるかどうかを、他の生徒からの評価と感想や不明な点など書かせて提出させる。また、自己評価も行い提出する。</p> <p>・他の事柄も歴史的背景があることを理解させ、今後の課題学習のテーマ設定に役立たせる。</p>

<指導上のポイントと考察>

サッカーのワールドカップが日韓共催で行われ、2002年、日本は空前のサッカーブームとなった。いままでサッカーに関心がなかったものまでも、にわかサッカーファンとなった。また、アメリカの大リーグではイチローをはじめ新庄や石井など多くの日本人選手が活躍しており、その他のスポーツについても、国際的・国内的に大きくニュースや新聞を飾るようになった。生徒をみると、平成12年に全国インターハイ岐阜大会を経験し、自分と同じ高校生の一流のプレーを間近で見ることによって、スポーツへの関心や興味が以前よりも沸いてきたと思われる。もちろん多くの生徒が運動系部活動にも加入しており、スポーツはわれわれの生活の中でとても大事な一部分となってきたと思う。

さて、新指導要領では、「世界史への扉」という単元を冒頭に設け、日常生活に見る世界史を取り上げ、身近なところにも世界史とのつながりが見出せることに気付くことによって、世界史への関心を高めることが意図されている。

生徒は、中学校の時には世界史をほとんど学習しておらず、世界史は未知の学習領域であるし、興味や関心を持たなければ意味不明のカタカナだらけのとっつきにくい科目となるか危険性もある。たださえ以前から世界史嫌いが叫ばれている中、身近な事柄が世界史と密接な関係があることに気付かせ、世界史を身近に感じることから興味や関心を引き出すように授業を行うことは今後の世界史を学習する上においては必要不可欠であると思う。

そこで、上に述べたようにわれわれの生活の中で最近特に身近になってきたスポーツの歴史に重きをおいた世界史の調査・研究・発表の授業を行うこととした。その事柄の世界史的な背景や歴史だけという断片的な知識を調べるのではなく、特にその競技の日本との関係や日本に伝わった時代、その発展について詳しく調べていき、発表させた。

また、普通科高等学校では日ごろあまり授業に使用しないコンピュータを積極的に取り入れた。新課程で導入される教科「情報」との関連もあり、いろいろな画面から必要な情報を取り入れる方法やその具体的な手段を学ばせた。「情報化社会」といわれ情報機器の使用だけでなく、社会の中にあふれるさまざまな情報の中で埋没しないように調べた情報の中から必要な内容を厳選し、取捨選択する力をつけさせなければならない。

- 注1 過去の歴史的イベントやそれに関わった人物名の暗記に力点を置いた今までの歴史学習を反省し、過去のできごとが現代のわれわれの身の回りにあるさまざまな事柄に影響し、その発展に関係しているということに気付かせ、自らの視点で追究し歴史的背景やその影響を考察する。  
また、スポーツの発祥の多くは海外であり、レジャーとして広がったのは19世紀の後半であると思われる。その時の日本の社会的様子と日本人の生活習慣ならびに文化の洋風化などの視点から、スポーツが海外から日本に普及した様子や影響が理解できるようにしたい。また、20世紀に起こった2度の世界大戦がスポーツに及ぼした影響についても考えたい。
- 注2 生徒に身近な題材を考えるのはなかなか難しい。生徒個人個人にはいろいろな興味や関心があり、それをひとつにまとめることは容易ではないからである。特に今までにない歴史の学習形態ということもあって戸惑うこともあると思われるので、「身の回りのもの」という幅広いテーマで調査するよりも、生徒全員が関心をもって調べ学習ができるであろうと思われる「スポーツ」にテーマを絞ってみた。
- 注3 世界史の授業は教員による講義形式中心の一方的な授業になりがちであるが、今後の歴史学習の導入の部分という観点から、生徒の興味・関心を高める意味もこめて、インターネットを利用した調べ学習を行った。この授業を通してコンピュータなどの情報機器にも興味を持てるようにし、プレゼンテーションの方法など自己表現の大切さも考えさせたい。
- 注4 生徒同士のコミュニケーションや協力体制がうまくいくように、共通の趣味や同じ部活動など興味・関心の度合いが近いものでグループ編成を行った。また、グループ全員が調べ学習に参加できるように、3人～5人のグループにした。
- 注5 仮説の設定に際して、「世界史への扉」を学習する2年生は、ほとんど世界史の知識を持たないため表面的な歴史認識にとどまることもあるので気をつけたい。
- 注6 コンピュータを取り扱うのがはじめての生徒も少なくなく、実際コンピュータを使って情報を集めるのは教員が行うことになる。また競技によっては歴史を調べようとしてもわずかしか掲載されていないスポーツもあり、苦労するのが現状である。そのため、他に「現代用語の基礎知識」「Imidas」や「知恵蔵」を利用した。ただ、個々のスポーツの歴史を調べるには専門書が必要となり学校の図書館では不足しているのが現状であり、今後県図書館などに出かけて調べてみるのもよいと思う。
- 注7 まだ世界史を学習していない生徒にとっては、課題研究の内容だけから歴史的背景をとらえることは難しく、理解も進まないが、今後の通史の学習の中で学んでいくことが大切であると思われる。また、3年生の後期には、これまでの学習をしめくくるという意味で課題研究を行い、まとめ発表させることも大切であると思う。
- 注8 今回は、現在では生徒がコンピュータの操作方法に不慣れなことから、時間がかかりすぎてしまうため、プリントやB紙などを使用して発表するが、今後コンピュータでの発表を行いたいと考えている。
- 注9 仮説との違いや研究によって新たにわかってきた点についてまとめるとともに、他の競技との関連性や影響なども詳しく調べ発表できるようにする。
- 注10 発表に際して評価表を全員に配布し、発表の態度やグループの協力体制、発表の内容など5つの観点について生徒相互で評価しあう。また、自己分析も行い次回の発表に有益なものとする。なお、この評価の内容について課題研究を行う前に生徒に提示する。

ソフトテニスを調査項目に選んだグループについて

< インターネットのホームページURLの例 >

・ 調査内容・・・ソフトテニスの歴史と日本への普及について

http://www.h2.dion.ne.jp/~h.tennis/sub2.htm = テニスの歴史、起源、原型など

http://csx.jp/~istc/history.html = ソフトテニスとは？、国際化したソフトテニスなど

http://www.niji.or.jp/home/color/softtennis\_history\_of\_softtennis.tem = ソフトテニスの歴史など

http://member.aol.com/oyaoyaoya2/TOPICS.HTM = ソフトテニスの歴史など

その他、硬式テニスの歴史などにもアクセスし、テニスの発祥や日本への伝達、普及などを調べてみる。

.11

< 課題学習 発表 評価表 >

発表テーマ		3年	組	番氏名			
評価	1 発表の声の大きさや態度	1	2	3	4	5	合計点
	2 調査項目のわかりやすさ	1	2	3	4	5	
	3 グループの協力体制	1	2	3	4	5	
	4 日本との関係が述べられている	1	2	3	4	5	
	5 課題研究のまとめ方について	1	2	3	4	5	
不明な点（新たに課題になった点）		感想（反省）					

## 「4つの実践によって明らかとなった課題」

### 1 「世界史への扉」のテーマ設定について

教科書には序章として「世界史への扉」と、巻末に主題学習の二つの課題学習が設置されているが、特に「世界史への扉」のテーマの設定には苦労した。世界史の大まかな流れが分かった状態で行う主題学習とは異なり、世界史を学習していない生徒たちに興味を持たせることを狙いとする「扉」のテーマ設定では、理解しやすいテーマを見つけることは難しく、さらに生徒それぞれの興味の度合いも違うからである。また「世界史への扉」を実施したのち、そのあと通史の授業との兼ね合いも大きな問題点であるように思われる。

### 2 「世界史への扉」の評価について

「世界史への扉」を調べ学習やプレゼンテーション活用の授業改善の一つと考えるのならば、その評価のあり方についても工夫が必要である。自己評価・相互評価・教師による評価など多様な方法とその配分などを熟慮しなければならない。また、それを全体的な評定にどのように結びつけるのかも今後の大きな課題である。

### 3 興味を持たせ、関心を高めるための方策

今回、興味・関心を高めるために授業のはじめや途中に「項羽と劉邦」「ワールドカップ」というテーマを設定し、その人物像や国家の特徴などをとらえる手法を実施したが、これまでに「三国志」「水滸伝」「世界の絵画」「世界の名言」「世界のオーパーツ」「紅茶とコーヒー」などのテーマで授業を行ったこともある。生徒はどの授業においてもとても興味や関心をもって学習し、家庭でも「歴史」を取り扱った番組などを見る機会が増えたようである。他に、どの場面でどのような授業を行うことが生徒の興味・関心を高めることにつながるのかの研究を続けていかなければならない。

授業実践研究を実施して・・・

一つの授業案の作成のためにインターネットや様々な図書を詳しく調査・研究することが、授業の改善、教師の資質の向上には不可欠である。日頃当然のように行っている講義中心の授業を見直し、改善を加えていく必要性を痛感した。また、年々変わる生徒に対して、生徒を引きつける授業を実践していくために、自分なりの新しい教材を開発し、さらに工夫を加えていくことが大切である。いろいろな先生方の授業を積極的に学ぶことも必要であり、学校内での研修やインターネット・eメールなどを通しての相互の交流も進めていく必要があると痛感している。